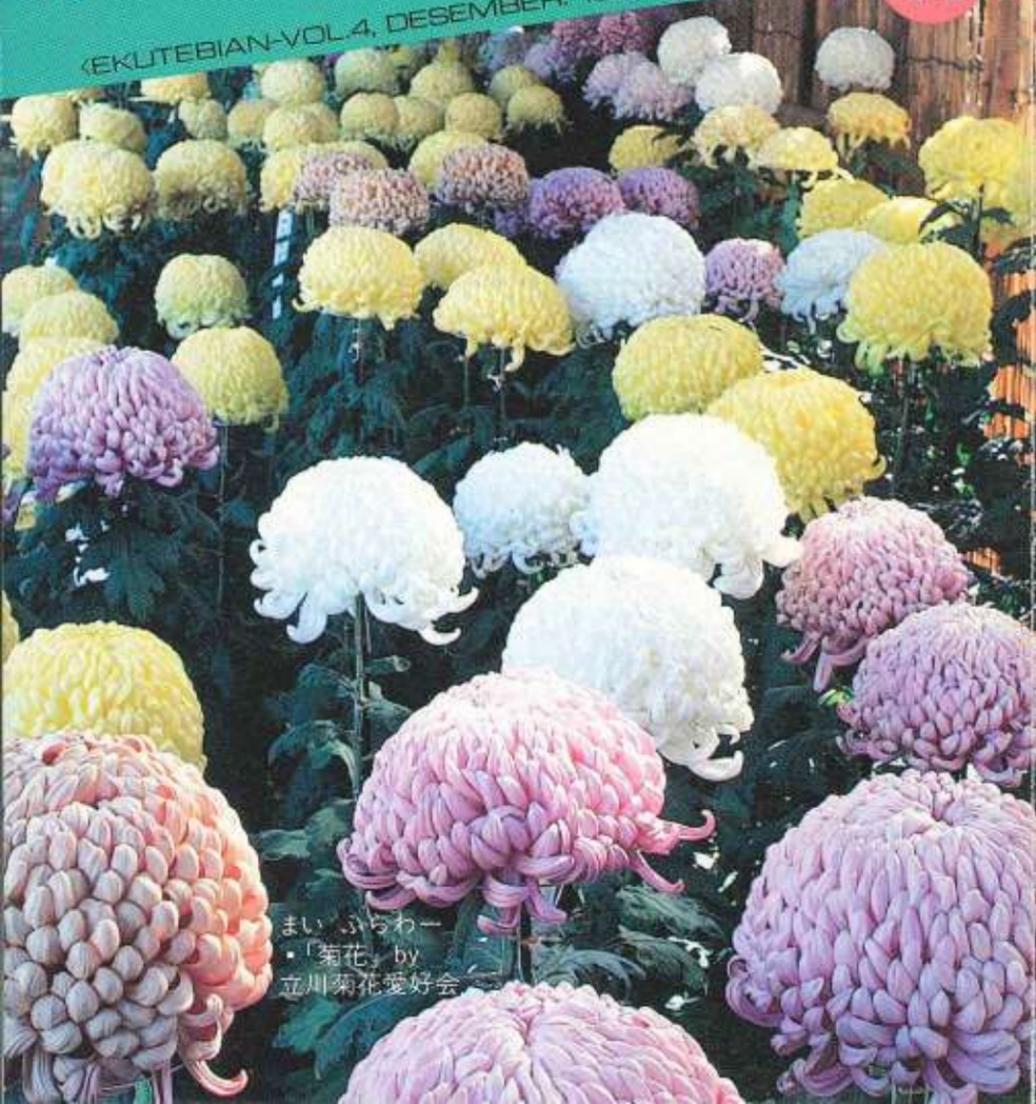
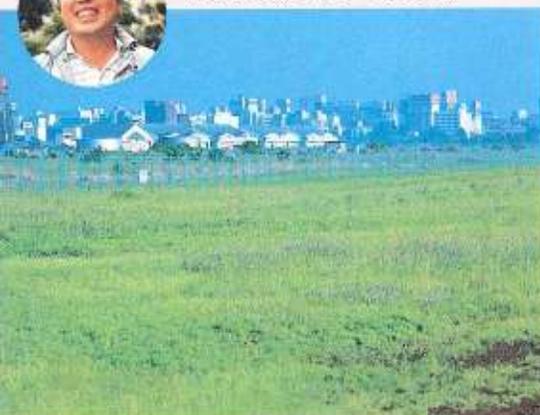
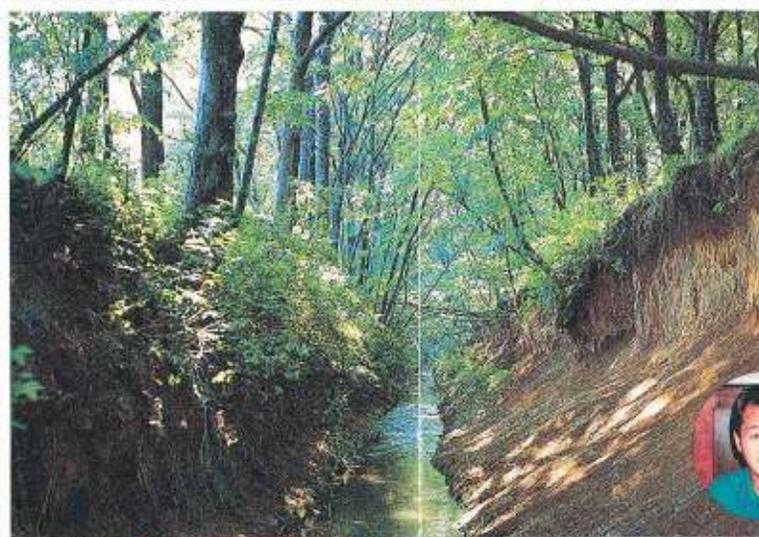
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
11
〈EKUTEBIAN-VOL.4, DESEMBER. 1987-EKUTEBIAN〉
まいふらわー
・「菊花」by
立川菊花愛好会

新版 立川七景

市から「立川はがき」第一集が発行された。新名所発掘と同時に、「わが町たちかわ」の宣伝にも役立ててもらいたいとの願いがこもっている。そこに賭けてゆくカメラマンの心意気もまた、ジンジョーじゃありませんですッ。

⬇広路1号からみた街並み by 山川吉久さん（柏町3丁目）。アサヒペンタックス。

⬅南北通路という新しい被写体にカメラをむけたところに、この絵はがきセット全体に斬新な空気を送りこんでいるようであります。

⬅立川駅南北通路&普済寺の朝by新藤清さん（高松町2丁目）。ニコンSRT。

⬅昭和記念公園by林史郎さん（一番町6丁目）なんと92歳という最長老カメラマン作品。

⬅樹林の玉川上水by須崎勇さん（幸町2丁目）。マミヤRZ。

⬆春本番の普済寺本堂 by 金沢泰雄さん（富士見町4丁目）。今回の「表紙」を飾った。ニコンSRT。

⬇湧きでる矢川の清流 by 佐伯政雄さん（羽衣町2丁目）。マミヤ。

らくがきだい！

北口と南口をむすぶ地下道に、右のような「らくがき」を見付けました。ここまで本腰をいれて描けば、まあ、認めてやってもよろしいのではないでしょうか、お巡りさん。

カメキチ登場

新版・立川七景を取材していて　5人のカメラマンにお会いすることができた　カメラを持たせたら一歩も譲らない　「我が道」を謳歌する姿勢は秋風にゆれて爽やかだ

子供の記録写真がヤミツキになって

新藤　清さん（高松町2）、なにしろ、「多摩の素顔」（朝日新聞主催）などですでに20枚以上が入選している、この世界では相当にカオのうれてる人。今年も「朝の杉林」が毎日新聞社賞に。休日ともなれば晴雨にかかわらず山へゆく。出来れば雨のほうがいい。ちょっとした晴れ間に傑作のチャンスあり。逆光の美学を尊ぶベテランぶり。

少年の頃から矢川わが川と愛してきた

佐伯政雄さん（羽衣町2）、学生時代から山岳部で鍛えた健脚と自然観察力は、今日も衰えをみせない。町内では副会長をつとめ、健脚向きと一般向きのグループを持ち指導にあたっている。少年の頃には矢川ではワサビを作っていたという。今日まで佐伯さんのこころには、矢川の清流が絶えたことがない。その矢川が今回の入選作品となった。

我流ですよとハニカミながら半世紀

金沢泰雄さん（富士見町4）作品のほとんどは風景写真である。戦争中にカメラを↙手にしてから半世紀の歳月が流れた。大ベテランである。地域の文化活動にも熱をいれ、この11月23日の富士見町文化祭にも自信作を用意している。自治会会長。オートの機械よりも手動の写真機を愛用。砂川三番の生れ。富士見町に移って五十年たつ立川人ぶり。

入賞式なんて場違いなところでした

山川吉久さん（柏町3）。本職は盆栽を育てることで結構、体力がいる。それにしてもやがんでやる仕事が多いから、撮影は格好のホビーという。それにしても、ご自分の作品が入選するとはユメ考えなかったそうだ。盆栽の仕事はいっときも眼をはなせない。それで被写体はどうしても手近な風景写真になりやすい。今回はそれが幸運につながった。

ファインダーにロマンを激写

須崎　勇さん（幸町2）、本格的に撮り始めてから10年。新婚当時は、よく2人で撮りに行った。時が過ぎゆくうちに、奥さんといるよりカメラの面倒をみている時間のほうが増えていた。「私は風景が好きで」と、アルバムをめくる須崎さん。その中に富士山がぎっしりと、詰まっていた。カメラは、ロマン。写真は体力だ。

たちかわ伝言板

秋に笑えば

恒例の「立川落語会」が、今年も抱腹絶倒の世界へ皆さまをお誘いいたします。

日時／11月8日（日）正午から4時まで

場所／立川中央公民館　3階　和室にて

（特注）笑い過ぎないでください。

★ベンツ売ります。

わが「えくてびあん」に、こんな電話が入りました。横田ベースの松本イサムさんより、愛車のベンツ1967 230Sを譲りたいと。誰かベンツを好きな方、連絡ください待ってます。
※連絡は「えくてびあん」まで。

真如苑だより

ベストやカーデガンをまとう人たちが少しずつ街をうめ、秋の深まりを感じさせる今日このごろ、郊外に足をのばし、散歩にもいい季節です。セーターなんかをちょっと小脇にかかえ、秋の落ち着いた気分を味わいにおこしください。

■日時　11月21日（土）　午後2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

立川のモニュメント⑩　首塚（くびづか）

秋の彼岸に普済寺に行った。境内で線香を売っている小父さんに、「首塚の場所を尋ねたら「お寺の横にある古い墓地の松の木の下にあるよ」と即座に教えてくれた。

首塚と聞いただけで、おどろおどろしく怨念が込められているような気がするが、墓地の中にこの塚を見たときは、菓子も供えられていて、血なまぐさい感じはしなかった。

塚には「首塚　立川宮内少輔宗恒之碑」とある。だが、この塚の下に何があるのか、誰が眠っているのかは、わからない。普済寺はこのあたりを治めた立川氏の館跡に建てられ、その菩提寺として建立されたことから、立川氏にゆかりの塚ということだけは確かだ。

塚の前には梅形の六つ紋が入った石板が立っている。この石板は立川氏の墓を守った二枚の石扉のうちの一枚だそうだ。

塚の前に石板があり、その横には赤い彼岸花が咲いていた。

（H・H）

普済寺内にある高さ二mほどの塚。普済寺には、このほか六面石幢（せきどう）などさまざまな文化財がある。

漢字テスト・㉒

空欄に一字押入を試みよ。

□ 間 紅 葉

速 戦 □ 決

漢字テスト・答

速（そく） 戦（せん） 即（そっ） 決（けつ）

長期に渡る戦いを避けて、一気にどとうのごとく勝負を仕掛ける戦いのこと。

林（りん） 間（かん） 紅（こう） 葉（よう）

直訳すると「秋、林の中にあって紅葉を焚きつけながら、お燗をして楽しんでいる」となる。これは、秋という季節の趣を叙情豊かに表現したものである。

吉報!! ミス立川の吉成さん、東京で準ミスに選ばれる！

「えくてびあん」で紹介をした吉成典子さんが、10月1日に行なわれた、「ミス東京コンテスト」で第2位となった。ミス立川が東京でランキングされるのは中崎由美子さん以来で、なんと23年ぶりのことだ。立川人もなかなかのものです。

工房から

●いよいよ秋が深まり、山肌にもみじの色でしょうか、まっ赤な色がいっきに増えてきました。秋、本番です。●秋といえば「読書の秋」。立川にも立川人の本があります。「立川飛行場物語」「ポストファミリー」「高尾の花」「夢はゆめ色」など、書棚の友にしたい本ばかりです。●立川にこんなすばらしい芸術品が有りました。（中面上部写真）ここまで描いたら、誰が見ても、いたずらがきとは言えない。世界の中心ニューヨークにも、こんな芸術ありました。立川もニューヨークと同じレベルか、それとも……。レベルと言えば、立川の美人が東京の美人コンテストで、第2位に選ばれた。立川のレベルも捨てたもんじゃない。●ほいほいと　豊年雀　えくてびあん。

（編集）石塚敦美　佐藤玲子　小川知子　神山清子　隅川理　田中恵子　半沢正弘　栗島弘子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第40号
昭和六十二年十一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11　ファインビルディング3F
電話　〇四二五（28）〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

KANBAN MUSUME

TACHIKAWA 5

ファミリーレストランやハンバーガーチェーンのお嬢さんの微笑みは、どこかアメリカ風であり、それでいて、そこに日本の笑顔がじつに巧妙に混合されている。今月はそんな「立川の」スマイルをお届けしましょう。

「ロッテリア」（南口店）の十山成美さん

「サンマリノ」（立川店）の柚谷さおりさん

「ロイヤルホスト」（立川南口店）の横井七重さん

「モスバーガー」（南口店）の西井千[illegible]さん

「ケンタッキーフライドチキン」（立川店）の橋本由美さん

「デニーズ」（立川店）の野口千[illegible]さん